

火の魔法陣

斎藤 栄

下

MARINE

SAFEMARINE

SAMU 270046 2
ZAX 2232



 集英社文庫

ひ まほうじん
火の魔法陣 (下)

1984年1月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

1988年8月30日 第8刷

著者 さいとう 斎藤 さかえ 栄

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印刷 大日本印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© S. Saitō 1984

Printed in Japan

ISBN4-08-750713-0 C0193

集英社文庫

火の魔法陣

(下)

斎藤 栄

集英社版

目次

海辺の爆発	六
生命の発露	四七
千恵子の心	八〇
白昼の殺人	一三〇
那智の火祭	一六四
黒い政治家	二〇三
意外な証人	二二七
火の国の愛	二七五

解説 中島河太郎

火の魔法陣
(下)

海辺の爆発

1

八月二十六日の日曜日は、朝早くから風もなく、蒸すような暑い太陽が昇っていた。首都圏のプールや海水浴場は、どこも人波に埋まる風景が見られた。

東浜運輸の前畑運転手は、午前六時三十分に、鶴見の本社に戻って来た。

大阪での仕事に手間取り、その遅れを取り戻すために、フルスピードで東名を走ったが、なんといつても、日本坂トンネルの徐行が辛かった。ここは大火災の後遺症があって、車間距離やスピードの点で、道路公団側の監督がうるさいのだ。

睡眠不足と暑さで、さすがの前畑も、くたくたに疲れていた。車からおりると、冷たいコーラを二本続けて飲み、日報を事務所に提出すると、そのまま仮眠室へ向かった。

「畜生！ 《熊》の奴……」

前畑は心の中で、忌ま忌ましそうに呪いの言葉を吐いた。吉田主任の横暴を思うと、ハンドルを持つのがさえ嫌になる。

それでも、仕事が順調にいけばよいが、大阪では苛々し通しだったし、仮眠室へ来てみれば、クーラーが故障で、内部は、まるでサウナ風呂みたいに蒸していた。

「クソ！　こうなりや、やけだ……」

前畑は、この暑さで眠れないのを知ると、自分のロッカーをあけた。ポロ布の下に、ウイスキーのポケット瓶を隠してあるのだ。

運転する者がアルコールを口にするのは、絶対禁止事項になっている。休暇になったとき、ゆっくり飲めばいいわけだ。しかし、条件の悪い仮眠室で横になるとき、ちよつとひと口、咽喉のどに入れるとぐっすり眠れることが多い。そして、ひと眠りしさえすれば、また元通りの元気が出ることを、運転手達はよく知っていた。

前畑は、こつそり、ポケット瓶の口をあけた。そして、きゅつと、ひと息にアルコールを咽喉におとした。灼けるような熱さが、胃の腑へ滲みわたってゆく。

「クソ！……」

前畑はそう呟くと、またアルコールを口に含み、次に唇で拭きとるようにして、瓶をしまった。

疲れた軀からだに、アルコールがひとつのショックを与えた。前畑はそのまま、最下段の仮眠床にころがりこんだ。

頭が痛かった。無理に寝ようとすると、一層、苛立ってしまい眠りにくかった。それでも、十五分ほどすると、前畑は高軒たかいびきをかきながら夢路を辿り始めた。

彼が眠ったのは、ほんの二時間くらいだろうか、浅くなった眠りの中で、前畑は夢を見た。後で考えれば、それが事件の予兆だったのかもしれない。

前畑は、真っ赤にボディを塗った車を運転していた。まるで郵便車か消防車のようなので、これまで一度も、そんな車を扱った経験がなかった。

——こんなのを運転するのは沢山だ。

——なんて重いハンドルだ！

——こいつはどこか狂っていやがるぜ……。

前畑は、ぶつぶつ文句を言った。だが、一人として、その言葉を真面目に聞く者はなかった。それが気に入らなくて、前畑はアクセルを踏み続けた。すると、ガクンと急停車した車は、ボディが歪み、彼の脚はそのためクラッチにぶつかった。

へいてえ……

と、思ったとき、目が醒めた。

彼の右脚が、木柵のベッドの手摺にぶつかったのだ。

目が醒めても、頭が痛かった。

時計を見たが、まだ二時間しか寝ていないことが分かった。

全身、汗でびっしょりだった。

「寝苦しいな。こんなときは、顔を洗った方が、さっぱりして、もうひと寝入りできるかも

……」

そんな風に思った。

しかし、結局、彼は何もしなかった。寝返りを打ち、ぐずぐずしているうちに、ますます汗をかいた。

起きて、コーラを一本飲み、また横になった。

「熊の奴……」

なぜか、吉田のことを思っては、愚痴めいた呟きが出た。

そうこうしているうちに、腕時計に組み込んだクォーツの目覚しが鳴って、午前十一時を知らせた。

もう横になってはいられない。正午には、LPGのタンクローリー車を運転して、真鶴に出發するのだ。LPGを扱っている会社から、東浜運輸へは、別の運転手が車を運んでくれているはずだった。

前畑は飛び起きた。

仮眠室を出て、外を見ると、ぬけるような蒼空あおぞらに、大きな入道雲が湧わいていて、寝不足の目に眩まよしかった――。

2

田波ていば梯子ていこは、車からおりるとき、梶の手をそつと握って、「ありがとう。うんと陽焼けして、びっくりさせてやるわ」

と言った。

「裏表だけは、ハッキリさせておいて……。どこへキスをしていいか、分からないと困るから」

梶は減らず口を叩いた。毎朝のオンボロ車で、海水浴に出かける梯子を、横浜駅まで見送りに来たのだった。

「言ったわね。覚えてらっしゃい。あとで……」

と、梯子は恋人を睨む真似をしてから、身を翻すと、日曜日の雑踏の中に駆け込んでいった。

約束通り、志津子は改札口のところで待っていてくれた。彼女としては、少し大胆すぎるくらい、胸許を大きくあけたデザインワンピースで、柄も、トラップのキングとクイーンが描かれているといった派手なものだった。手には、水着類を入れたバッグをさげていた。

梯子は瞳を大きく見開いた。

「わあ。凄いじゃない。どこで買ったの？」

「このワンピース？」

志津子は訊き返した。

「そうよ。珍しいじゃないの、その柄……」

「元町よ。イタリア製だっていうけど、とても感触がいいの」

「目立つわ」

と、梯子は感心して、なおも、しげしげと眺めた。

「それより、藤沢までの切符、買っておいたわ」

と、志津子は言って、用意の二枚を取り出して見せた。

「早いね。あなた、お昼食は？」

「軽くすませて来たの。あなたの方は？」

「朝食が遅いから……大丈夫よ」

「だったら、このまま、海へ行つて、向こうで何かいただきましようか？」

「そうね。もうじき正午を過ぎてしまいわ。行きましよう」

二人は、下りの東海道線で、藤沢まで乗った。夏休み最後の日曜日というので、学生達や家族連れが、続々と片瀬海岸へ向かつており、車内は百パーセント以上の混みようであった。藤沢駅で、小田急線に乗り換え、片瀬江ノ島まで行く。そこは片瀬川の最下流で、もう江ノ島が目と鼻の先の河口付近である。

電車をおりると、海の匂い^{にお}がした。その匂いを追いかけるように、遊歩道に向かつて行く。と、やがてガソリンと排気ガスの臭い^{にお}がした。乗用車ばかりか、トラックや特殊車、中には危険物の標識をつけた車までが、炎天下を、苛々しながら走りぬけていった。

「危ないわ。気をつけなさいよ」

一台のタンクローリー車が、青黒い排気ガスを残して、西へ向かつて走って行ったとき、志津子が注意した。

「本当に……、なんでしよう、あの運転は……。事故を起こしたらどうする気なのかしら……。あの松林のすぐ向こうが海水浴場なんでしょう」と、梯子が言った。

「そうよ。もう少し河口から離れたところがいいと思うわ。マリンパークの先……」

志津子が先に立って、舗装道路を歩き続けた。

「また来た……。今日は、乗用車より、なんだか、トラック類が多いみたい」

「月末のせいかもね」

「この頃、外科病棟が満員よ。大部分が交通事故の犠牲者なのよ」

「こんなところは、危険物を積んだ車を走らせないようにすべきよ」

志津子も、口を尖^{とが}らせるような言い方をした。

二人が海浜の方へ折れたのは、防砂林が切れかかった地点で、そのあたりになると、海水浴の小屋もマバラになりかけていた。その代わり、起伏のある砂丘のいたるところに、派手なビキニや海水パンツの男女が、身を太陽に干しているのが目立った。

松林の所々では、携帯用のプロパンガスのボンベを使い、即席の料理を作って食べている家族の一団もあった。

蟬^{せみ}が鳴いていた。

「その後、例の課長さん、うるさいこと言わない？」

フト思い出した如^{ごと}くに、梯子が訊いた。志津子につきまといっていた秋田課長のことである。

「あれ？ 心配させて、悪かったわ。なんとか……」

「会社勤めって大変ね。上役の言うことをきかないといけないから。その点、看護婦はいいのよ。医者 commands は絶対だけど、看護婦はつぶしがきくし、今、不足しているから、結構、えばってられるし……」

「仕事の内容も違うと思うわ。夜勤が多いんでしょう？」

「まあ、そうね、職業病になりやすいことは確かよ。だから、たまには、こうやって海へ来て遊ばなくちゃ……。さ、着換えましようよ」

二人は、手近の〈相模屋海の家〉へはいった。

志津子は、ここでも真っ赤なビキニを身につけて、梯子を驚かせた。しかし、志津子の肌が白いので、この強烈な色彩も、新鮮な印象を見る者に与えた。

梯子の方は、肩ひものない最新型の水着だった。彼女は黙っていたが、今日のために、梶が珍しくプレゼントしてくれた品であった。色は白にブルーの縁取りをしたツートンカラーなので、この方もかなり人目をひいた。

この恰好になってから、二人は、海の家のレストランを軽く食べた。そして、しばらく休憩してから、海へはいった。

海辺の水は、生温かかったのに、少し泳ぐと、水温はぐっと下がった。

「もう八月の末ね。秋だわ」

泳ぎながら、梯子は湘南の蒼空を仰いで呟いた。

「出たいわ。食べたばかりのせいかな、少しおなかが痛いのに」

と、志津子が言った。

「いけないわね。私、常備のお薬もっているわ。それをあげましょう。それに少し砂浜で温まるといいわ」

梯子は、看護婦らしく、テキパキした調子で言った。

3

石黒刑事と有本副士長の二人は、国鉄藤沢駅で江ノ電に乗り換えた。江ノ電は、江ノ島鎌倉観光電鉄のことだが、単線でのんびり走る姿が、かえって近頃のヤングに人気があった。

江ノ島駅で下車し、狭い州鼻通りの商店街を歩いて、弁天大橋の方に向かった。

「……しかし、今日は来てくれないだろうと思っていたんで……よかった」

有本は、歩き出して間もなく、ホッとした口調で言った。有本は、胸に大きな鮫さめの絵のついたレジャー用のシャツを着ていた。どこから見ても消防士の面影は窺うかがえなかった。

「このところ、長いこと休暇をとっていないんで、このくらいはね。それに、今日のことは前からきめていたから……」

石黒はさりげなく言った。これは予定していた科白せりふである。むろん、嘘だった。真部警部の指示がなければ、とても、こんな風にのんびり海水浴に来られるような勤務体制ではない。石黒の恰好は、赤線二本のはいった開襟シャツに、タオルなどを入れたスポーツバッグを

持っており、どこから見ても、刑事らしいところはなかった。

「海はいいですよ。気分転換すれば、また、やる気は出てくるんだし……」

と、有本は、石黒より、ほんの少し先に立って、ぐんぐんと前に進んだ。

半裸体の男女の群れと、なん度もすれ違った。みんな一様に赤黒く陽焼けしている。ひと夏の遊びの歴史が、肌に焼きついていく感じだった。

「しかし、この調子じゃ、いもを洗うようで、満足に泳げないかもしれない……」

石黒は正直にそう思った。もう少しすいているはずだった。

「この片瀬川の近所じゃ、とてもダメですよ。もっと西の方へ行かないと……」

有本は、初めから、その考えでいたようである。

「それは知っていますよ。しかし、あまり向こうへ行くと、今度は、遊泳禁止区域になるでしょう」

「だから、そのギリギリの境界がいいんです。なんといっても、人込みから離れられるだけでもいいし……。あの辺にはシリナガがいっぱいいるんです。知ってますか？」

「シリナガ？ なんですか？ それは」

石黒は、有本と肩を寄せ合うほどのそばに近づいた。

「シリナガは方言ですよ。普通はウミニナというんでしょう。三センチくらいの大きさの細長い巻貝なんです」

「貝ですか」